

路變更の爲に、船用炭として盛に輸出せられし狀況を述べ、「南北兩米に於ける水産物需要狀況」(小川清一、同誌)は、北米に於ける水産物生産の狀況及び羅典亞米利加に於ける其の需要狀況を記し、「支那蠶絲業」(芳賀權三郎、同誌)は、支那の上海、廣東及び四川地方の蠶絲業の狀況を視察して、支那の斯業は尙幼稚なれども、土地の廣大なるを、阿片の栽培禁止により、阿片耕地の桑園に變ずるもの多きことにより、將來本邦の勁敵たるべしと斷じ、「羊毛の需給に就て」(月田藤三郎、同誌)は、世界に於ける羊の分布を論じ、日本の需要狀況に及び、「米の問題」(遠藤金英、歴史と地理)は日本に於ける米の生産、需要の狀況を略説し、「土地と人文」(同人、同誌)は著者が北陸地方旅行の見聞録とも見るべく、「戦時中に於ける我工業の發達」(小西正二、地學雜誌)は、戦時中本邦工業發達の狀況を統計的に記述せり。交通の方面にては、「亞弗利加大陸の脊梁骨と交通系」(小林房太郎、同誌)は主として東部亞弗利加の交通系の將來を論じたる翻譯物なり、「海運に就て」(宮崎清則、同誌)は、大戦以來の國際汽航競争の狀況を述べ、「西比利亞の河川と北極海との連絡航路」(内田寛一、史林)は、西比利亞の内陸水路網の狀況を敘述し、「航空術に就て」(和田秀穂、地學雜誌)は、純軍事上より進んで速達交通機關として利用せられ、隨て交通地理の對象たらんとしつゝ、ある航空機の理論を述べたり

「太平洋の交通」(下田禮佐、歴史と地理)は太平洋に於ける探検交通の狀況を述べ、「日本を中心とする世界」(遠藤金英、同誌)は日本の交通上の地位を述べたり。地誌に關するものには、「西比利亞の土地と住民」(文部省)は西比利亞の地形、産業、交通、住民等

の狀況を述べ、鮮明なる地圖三葉を添へたり、「朝鮮地誌資料」(朝鮮總督府)は彙に紹介したるが如く、一の統計に過ぎざるも、朝鮮地誌調査の重要な副産物と云ふべく、「アルサス・ロルレーヌ」(下田禮佐、歴史と地理)は、久しく獨佛間の問題とされる同州が佛國の國防上重要な地域たるを、世界稀有の鐵鑛産地たることによりて兩國間の争點とされるを述べ、「南米貿易」(西田與四郎、同誌)は主として南米の亞爾然丁、伯利西爾、智利(A、B、C)三國の貿易の狀況を述べ、「英領ニューギニアに就て」(金原信泰、地學雜誌)は同島の一級地理を記し、「山東省瞥見記」(佐藤傳藏、同誌)は同地の見聞録を載せ、「南洋新占領島の現況」(根本重治、同誌)も南洋の元獨領諸島の概況を通俗的に録したるものなり。英領ホルチオ島の一瞥(野田勢次郎、同誌)は元に同島の地文地質を論じ、バルカン半島の文化の分布(小林房太郎、同誌)は、同半島の文化が、民族の移住混合によりて如何に複雑とされるかを記せり。其他統計、案内記類には最近朝鮮事情要覽(朝鮮總督府)、臺灣事情(臺灣總督府)、北支那貿易年表(南滿洲鐵道會社)等注目すべきものなるべし。(下田)

彙報

地方史誌編纂概況の調査

京都帝國大學文學部國史研究室に於ては彙に地方史研究の資料として府縣郡市町村等に於ける歴史編纂の狀況を取調べ地方史書

を蒐集せんとして各府縣廳に宛て(一)現在府縣郡市町村誌編纂事業の概要、(二)府縣郡市町村等の公共團體より出版せられし地方史書目及び其卷數、編纂者出版年月の二箇條に就きて照會したりしが本誌編輯迄に回答を得しもの、京都府、徳島、埼玉、群馬、鳥取、沖繩、秋田、福岡、廣島、奈良、佐賀、福井、長崎、兵庫、鹿児島、熊本、宮崎、島根、山梨、千葉、愛媛、滋賀、宮城、愛知、山口、高知、静岡、茨木、大分、和歌山、神奈川の三十縣及び奈良縣宇陀郡、廣島縣賀茂郡、同佐伯郡、長崎縣佐世保市、埼玉縣入間郡、同大里郡、同忍町、同北足立郡馬室村、同北埼玉郡田ヶ谷村、石川縣金澤市、同河北郡、同珠洲郡、同羽咋郡、同鹿島郡、同石川郡、同能美郡、同郡川北村、同島越村、同江沼郡庄村、同郡動橋村、長野縣東筑摩郡の二市十郡一町六村とす。内照會箇條に該當するものなき者、回答の不完全なる者及び圖書寄贈の事のみにして照會箇條に回答せざる者等凡て十一縣一市十一郡一町一村あり。其の餘に就きて編纂の概況を見れば目下編纂中或は改訂編纂中の者は

岡山縣、群馬縣、茨木縣、宮城縣、滋賀縣、静岡縣、廣島縣、福井縣、和歌山縣、高知縣

神戶市、姫路市、長崎市、廣島市、仙臺市、金澤市、福井市、松江市、高知市

兵庫縣武庫郡、同川邊郡、同加東郡、同多賀郡、同飾磨郡、同神崎郡、同水上郡、同三原郡、奈良縣宇智郡、同吉野郡、滋賀縣滋賀郡、同蒲生郡、同神崎郡、同犬上郡、同東淺井郡、千葉縣東葛飾郡、同匝瑳郡、同君津郡、同千葉郡、同夷隅郡、同安

房郡、静岡縣榛原郡、宮城縣柴田郡、同伊具郡、同名取郡、同玉造郡、群馬縣碓氷郡、同北甘樂郡、福井縣遠敷郡、同大飯郡、同南條郡、同足羽郡、廣島縣豊田郡、同世羅郡、同芦田郡、同甲奴郡、島根縣八束郡、同大原郡、同邑智郡、  
の十縣、九市、四十郡にして、既に編纂完了出版せしものは

秋田縣、鳥取縣、和歌山縣

仙臺市、金澤市、甲府市、千葉市、大津市、姫路市、和歌山市、熊本市、佐賀市、佐世保市、大分市、鹿児島市

徳島縣名西郡、群馬縣邑樂郡、同多野郡、埼玉縣入間郡、石川縣羽咋郡、同鹿島郡、同石川郡、秋田縣川邊郡、廣島縣賀茂郡、同佐伯郡、同高田郡、同比婆郡、同山縣郡、奈良縣山邊郡、同磯城郡、同北磯城郡、同宇陀郡、同高市郡、佐賀縣佐賀縣、同

三養基郡、同神崎郡、福井縣今立郡、同足羽郡、同丹生郡、同吉田郡、同三方郡、同大野郡、同坂井郡、同敦賀郡、長崎縣彼杵郡、兵庫縣川邊郡、同印南郡、同神崎郡、同耕保郡、同赤穂郡、同朝來郡、同美方郡、同多紀郡、鹿児島縣伊佐郡、京都市

愛宕郡、同紀伊郡、同宇治郡、同綴喜郡、同南桑田郡、同北桑田郡、同船井郡、同天田郡、同加佐郡、同中郡、同竹野郡、島根縣仁多郡、同飯石郡、同安濃郡、山梨縣東山梨郡、同東八代郡、同西八代郡、同北互摩郡、同南郡留郡、千葉縣市原郡、同

印旛郡、同海上郡、同山武郡、同香取郡、滋賀縣栗太郡、同野洲郡、坂田郡、同東淺井郡、同伊香郡、同高島郡、宮城縣伊具郡、同互理郡、同志田郡、同栗原郡、静岡縣濱名郡、同駿東郡

同志田郡、同榛原郡、同小笠郡、同周智郡、大分縣日田郡、和

國歌山縣有田郡、同伊都郡、同東牟婁郡、長野縣東筑摩郡の三縣十二市八十四郡及び多數の町村郷土誌なりといふ。

大山爲起翁事蹟顯彰記念遺墨展觀

稻荷社祠官にして、荷田春滿と略其年代を同じうし後古神道興起の時に際して唯一神道及び社家神道の爲め最後の巨光を放ちたる荃水翁大山爲起の遺編、及其墳墓の發見ありしを機とし、翁の事蹟を顯彰せんとして、昨年九月十一日、緣故深き伏見稻荷神社に於て其祭典を執行し、又遺書遺墨を蒐集し展觀したり。其中主なるものには、新發見の稻荷社記録貳拾貳冊、同附圖、秘卷各壹冊を初めとし、延喜神名式比保古、日本書紀味酒講記、氏族母鑑、天孫本紀花鬘草、和歌詩記等の自筆本、職原抄玉綬卷、十種神寶秋訣卷、古語拾遺私考唯一傳卷、菅家傳記、倭姬世記稱葉抄等の著述ありたり。

第五回京都大藏會

昨年十一月九日京都府立圖書館に於て第五回大藏會の陳列品展覽を催せり、先づ第一門は聖德太子に關する圖書にして、その中憲法十七條は、佛教大學藏の永正書寫の憲法を擧ぐべし、上宮御製疏は三經共に寶治元年版の陳列あり、中にも久原文庫出品の雖然大德手澤本はとゞすべし。なほ凝然自筆のものには南都佛教圖書館より法華疏慧光記一卷の出陳あり。次に太子傳に關するものは國寶の知恩院藏の法王帝說、大原三千院藏の太子傳殘篇、西本願寺藏の上宮太子御記を擧げざるべからず。御記は覺如の筆に

して、親戀より寫傳せしもの、以て親戀の太子傳資料を窺ふに足る。三寶院の太子傳、久原文庫の太鏡百鍊鈔、太鏡底容鈔及び法隆寺藏の室町時代の諸傳等何れも稀觀の典籍なり。次に講式和讃表、白類の中には、宗性自筆の勝鬘問答記(南都佛教圖書館藏)を始め親戀の太子和讃殘簡あり。太子の畫像、繪傳には、仁和寺の國寶太子像並びにこれに酷似せる西本願寺のもの、神田氏藏の冷泉爲恭華の太子像、法隆寺の聖皇曼荼羅、古く眞宗道場に安置せられし光明本尊等最も注意すべし。

次に第二門として東寺觀智院金剛藏の圖書の一部を陳列す。該圖書は未だ嘗て世に出でたることなきもの、みなれば何れも珍重すべきものなり。版本眞言部には高野版の秘藏寶鏡、釋摩河衍論秘密曼荼羅十住心論、性靈集筆枚擧に違あらず。版本雜部に於ては永德及び應永開版の五部大乘經の一部は未だ世に知られざりし印本なり。寫本部の中には所謂東寺三寶の筆になりしもの傳持のもの等頗る豊富なり。悉曇部には國寶の悉曇藏をはじめ保安三年勝覺の筆になりし種子あり、種子は殊にその文様ある料紙によつて注意せらる。諸宗部中にありては要集依憑記は、今日まで佚書と看做されしが存在を確めし點に於て貴重なり。史傳部には國寶の入唐求法瀛禮記四帖、三寶繪詞三卷最も人の目を惹くに足る。最後に傳教大師以下諸種の目錄を陳列せり。(橋川正氏報)

史學研究會

例會 昨年十月四日午後一時より文學部第六教室にて開催し、左の講演あり。

一、曲舞に就いて

會員 岩橋小彌太君

言繼脚記に見ゆる曲舞の曲名によるときは曲舞は幸若舞と密接なる關係あるものなれども謡曲中に見ゆる曲舞は幸若舞さは大いなる相違あり、これ流派の相違に基くものなり。觀世觀阿彌が能樂の中に曲舞を取込みしより大いに時の好尚に投じ、これより能樂繁榮の基をなせり。曲舞は能なればシテアキ等の役者なく、又役によつて粉裝を異にする事なし、其の音曲は拍子を主とし、樂器も打樂器のみを用ふ。史上に於ける曲舞の初見は南北朝時代にあり、室町時代に幸若氏一流流行し、信長家康又これを寵用せしかば舞即ち幸若舞の如くなり、曲舞の稱漸く耳遠くなれり幸若氏が幕府の扶持を受くるに及び一般には其の舞を賞識し得ざる事となり都會にては笠屋、大頭等の觀世舞あり、又宮境内に小屋を建て、舞太夫と稱して興行するものありしが次第に衰微し多くは歌舞妓の内に流れ入りたりしが如し。地方の曲舞々は土御門家の配下となりて陰陽師と稱し僅に其の裔をこぞめたり云々。

一、ロマンチック時代に於ける一青年史家の生立

會員 文學博士 坂口 昂君

此の講演は本誌研究欄に收むる所なり。

例會 十一月二十九日午後一時より京都帝國大學々生集會場階上にて開催す、來會者は講演の爲態々東京より來會せられたる會員文學博士三上參次氏以下百五十名先づ庶務會計擔任桑原文學博士の諸般の報告ありて講演に移る。

一、北京の天主堂

會員 文學博士 新村 出君

支那に耶蘇教の渡來せしは日本に於けるよりも少しく遅る、利

覽發の明の神宗に謁したるは西曆一千六百年に在り。帝即ち宣武門内東邊に邸宅を賜ふ、これ所謂南堂の前身なり、徐光啓、李之藻等之に歸依し天學初國の如き著述も編輯出版せられ、其死するや阜城門外西北數町の柵欄兒に墓地と勅賜門を賜ふ。利瑪竇は名義問題典禮問題に調和的態度を持せしが、其の後繼者なる龍華民は之に反對して大に支那朝野の物議を醸し更にドミニカン派の渡來するや益々龍華民の主義に依る。清の順治年中ゼスイツト僧循匡國の法王廳に使し此の問題に就て説く所あるや、之より復利瑪竇の主義を採用す、北堂は康熙三十二年自進、張誠等が帝の病を治めし功に依り今日の國務院の位置に邸宅を賜りしを濫觴とす、東堂の起原は辨ならざるも、北堂より少しく古く東安門より東北の位置に成り、乾隆年間耶世寧、艾啓家、蔣友仁、巴德尼等の畫を以て龍を得るや、漸く復盛にして康熙末年よりラザリスト派の渡來ありて教父 德理格は内城の西北、西直門通に邸を購入するあり西堂の前身となるあり、唯北堂は其後變遷して今の位置となる布教に伴ひて元代の觀象臺を改造し湯若望、南懷仁等之に參與し南堂の西に時憲局を設置し曆を頒布す、阜城門外西北二里に正福寺墓地あり、これ亦元天主堂の在りし所なり、以上六堂には變遷消長の沿革ありて吾人には興味深きものなるも今は僅に其の概要を話すのみ云々。

一、江戸時代の思想問題に就て

會員 文學博士 三上 參次君

思想問題には其の起りし時代に巧に解決せらるゝことあり、又末解決のまゝ、後世に持越さるゝことあり。今日の所謂アモクラシ

讀史會

一の實現の如き我が歷史上に於て既に大化改新以來屢起りし所に於て敢て異とするに足らず、其他今日の思想問題中には昔の問題の引続きと見るべきもの多し、今それ等のうち江戸時代の思想問題に就て述ぶべしとて赤穂義士の問題、寛政異學の禁につき當時の識者の議論を述べ、又朝幕調和の問題も大阪落城後直に起り、之と關聯して幾多の問題か識者間に長く議論の種となりたりとて戸田茂暉、近衛基熙、林道春、熊澤蕃山、伊藤仁齋等意見を紹介し

要するに此論は武家が政權を執るときは直に起るべき問題にして此の問題を最も有力明確に解決したる平重盛の所謂四恩の論の範圍を出でずと斷じ、之と關聯する湯武放伐論、許魯齋問題、賴朝論、正成論、孟子論、内外本末論等に就て更に當時學者の言を引きて詳細にその論旨主張を説き、此等諸種の議論が相合して遂に王政復古となりしものなるが、中にも湯武放伐論と朝幕關係論の二つは王政維新と共に全く解決せられて今後再び起ることなからんも、其他の問題は未解決のまゝ、今日に残れり云々。

右終りて選舉の結果(いろは順)今西龍、濱田耕作、原勝郎、西田直二郎、小川琢治、内藤虎次郎、桑原階藏、坂口昂、三浦周行、新村出十氏の當選せるを發表す、時に午後五時席を階下に遷して有志晩餐會を開き午後九時散會せり、當日會場には新村博士の講演に關する泰西水法、西儒耳目資、遠鏡法、職方外記、坤輿外記、奇器圖說、靈臺儀象志、幾何原本、天學初函、曆象考成、儀象考成、清文彙言等の書籍以下同博士將來の天主堂寫真等數十點を陳列したり。

例會 昨年九月二十六日午後六時より學生集會場に於て、新入生の歡迎會を兼ねて例會を開催す。出席者三浦博士、西田、宮棗下川、牧、桑原の諸學士、橋川、六人部、源、山本、岩橋、梅原樽原の諸君なり。左の講演あり。

源 豐宗君

一、道元と曹洞宗  
鎌倉時代に勃興せし幾多の宗派に於て、事實上其の宗旨の存立を認識せられしは禪宗と淨土宗にして、其の他の宗旨は鎌倉時代の末若くは足利時代に至りて宗旨として漸く獨立の形をなせるものなり。曹洞宗の如き亦此例に漏れず、能仁、榮西によりて我國に禪宗の唱へられて後、道元入宗して天童の如淨より曹洞禪を傳へて歸朝せしも何等立宗的態度に出づる事なく、或は深草に、或は越前の志比に禪院を建立して宗風を舉揚せしが如きも是は唯眞實求道者の爲めの一教團と解すべきのみ。故に道元は禪宗、佛心宗、達磨宗、或は又曹洞宗と稱する宗名を極力之を排し、其の之を稱するを以て天覺破句となせし事、其著正法眼藏佛道卷に見ゆる所なり。而して曹洞宗の名の初めて唱へらるゝに至りし年代は之を明にし難しと雖も、恐く其門下の播延して臨濟一派に對し對立的狀態をなすに至りし鎌倉時代の末、若くは南北朝の初期なりし如く、すでに貞治四年の越前寶慶寺の審進狀に曹洞一宗の名見たり云々。

一、菅太仲先生と福山藩の教育 文學士 西田直二郎君  
先づ茶山の學門性行及び其の幼時に於ける母の薫化を説き、其

學統に及び、福山に於て茶白山下に廉塾を開きし事蹟を述べて、福山池田氏所藏の茶山と其の交友の間に往復せし數十通の書翰を示しつ、茶山が白川樂翁の知遇を得し事、伊能忠敬と親交ありて其尺牘中には、忠敬の測益に對する計畫を報ぜるものある事を述べ其他近藤守重、大槻玄幹、立原翠軒、頼杏坪、北條謙四郎等の手翰の文意を細説し、其の交遊の狀態を彷彿せしむ。中にも門田堯佐の書翰は、茶山の練筆維持法等を語り、塾の有様を知るの好資料なり。かく廣く天下の諸名士と交り、當時の迫り行く天下の形勢を一々看取し、時代の風潮を夙に知悉し、以て子弟を教へ、練筆は一種獨特の色彩を放ちたるなりと述べ、次に福山藩の教育に及びて、福山藩にはすでに弘道館あり、當時の藩主阿部正精は好學の士にて藩の教育に留意し泰西の文物を輸入し、文教の興隆に努め、茶山の練筆をも大いに保輪する所ありたり。是れ實に幕末に於て福山藩が一異彩を放ちし所以也。正精は又茶山を擧げて其六男正弘の傳育に任せしむ。正弘が後年の果斷的政策亦其の幼年時代の教育に負ふ所なくんばあらず云々。

一、或る戦國武士の自叙傳

文學博士 三浦 周行君

本誌研究欄に掲載あれば略す。

例會 十月二十三日午後六時より學生集會場に於て例會を開く出席者三浦博士、江馬、魚住、宮森、鈴木、桑原の諸學士、橋川六人部、源、江藤、中村の諸君、左の講演あり。

一、蓮如上に關する一二の史料

橋川 正君

堺市貞宗寺及京都市常樂寺各所藏の親鸞上人繪傳の蓮如自筆の裏書に就て其の寫眞を示しつ、説明せらる。前者は文明二年秋道

見の願ひし所にして、其の播州住、吉郡境、北庄の文字は、堺が當時なほ大和川を挾んで其一部の攝津に屬し居たりし事を示し、堺市沿革史料として重要な價值を有す。後者は文明七年八月八日越前幸羽郡北庄濱にて釋蓮崇(後に下間姓を稱す)の請願せし所のものなり。蓮崇は其月忽ち蓮如に坂きて富樫氏に據り吉崎の道場を燒拂ひしものにて、其當時に於ける蓮如と蓮崇との關係に多少の光明を與ふるものなりとて、富樫氏と高田専修寺との關係より高田派と本願寺派との軋轢及び吉崎燒拂に至りし事實を説き更に其後に於ける蓮如と蓮崇との關係を述べられたり。尙三河額田郡に於ける蓮如の息女と傳へらるゝ龜姫の墓に言及し實は教如上人の息女なる事を述べられたり。

一、朝鮮史料採訪談

文學博士 三浦 周行君

今回は主として南鮮に於ける對馬島民の居留地たりし齋浦、壙浦、釜山浦三浦の遺跡を踏査したり。對馬は日鮮兩國間に介在し朝鮮に對して政治的に特殊の關係を有するが、又經濟上に於ても古くより朝鮮に物資の供給を仰ぎ夙に通商行はれぬたり。件の三浦の如き實にかゝる因縁によりて發生せしなり。其の居留地として開かれし年代に就ては異説あるも、最初は當に三浦に限らず自由沿海の港に於て交易しむたるものにして、其の交易には多くの日子を要し勢ひ居留の必要を生ずるに至りしなり、既に太祖の時には慶尙道に二千人の居留民ありき。世宗王の時對馬を伐ちし事ありて以來暫く兩者の交通絶わしが其後宗氏の請によりて釜山及齋浦を許し後更に壙浦をも許せり。されど是は開港場として許せしものにて居留地として許されしは嘉吉元年の約定による。其

後永正七年三浦の亂あり、交通再び絶わしが後齋浦に限りて許され、天文十年日鮮人の争ありて追はれ、十三年改めて釜山を許されたり。文祿慶長の役に又交通絶え、慶長十四年に至りて家康宗氏をして朝鮮と交通せしめ遂に釜山に館を置く事とせりて各地に於ける記録の記事と遺蹟の踏査とを詳説せられたり。

●支那學會

例會 昨年十月三日午後七時より文學部第六教室にて開く來會者八十名。

一、清の世祖の入山に就て 陳 楷 之君

順治帝が入山に就ては諸説多しと雖も實は愛姬董小宛の死を悲しみて清涼山に入りしものなり即ち吳梅村の清涼山讚佛詩に可憐千里草萎落無顔色とあるは之を寓せるもの而して康熙帝の如きも屢々清涼山に至り頂上へは從者を從へずして上るを常とせり、これ順治帝に面會せんが爲なり紅樓夢が此の情緒を題材とせるは人の知る所、順治帝の即位後十八年に崩せしことは信すべからず云々。

一、朱思本に就て 内藤 教授

元代の地圖地誌の粗笨なるに不平を抱きし朱思本は天下を旅行して至大延祐の間に精密なる地圖を作成せり、其著、貞一齋雜著に據るに苦心の程察すべく所製の地圖は清初迄も尙權威を保てり但西本願寺所有の文祿役將來の地圖は又別に朱思本系統以外の地圖なるが如し云々。

例會 十月十一日午後六時より同所にて開催す。

一、文學上より見たる楹聯 文學士 青木 正兒君

先づ楹聯の起原に就いて桃符説の存することより他の二三の異説をも列擧し一一之に批判を加へ、五代の吳越國の龍華寺の僧契盈が忠懿王の爲に碧波亭に題せし對句が對句の最も古きものならむことを述べ、支那人が對句に苦心する有様を紹介して以て其の文學的價値に論及せり。

一、支那旅行談 文學博士 新村 出君

昨年九月上旬より十月下旬に亘る支那旅行に關する趣味深き談話を爲し、主として北京城内外見物の所感文華殿、武英殿の陳列清眞寺、白雲觀、法源寺の訪問、四庫全書觀覽の諸項を述述し蘇州、杭州所見の一二に及べり。

●神田香巖翁薦事記念の陳列

故京都帝室博物館學藝委員神田香巖翁は夙に古鈔舊槧金石書畫の收藏を以て聞けしが、這般同籍瘞瘁碑の竣成せしを記念として昨年十一月二日嗣子喜左衛門氏は紫野大徳寺塔頭玉林院に於て翁の薦事を修め且つ遺愛の古書金石拓本の類を展覧せり。主なる陳列品左の如し。

第一類、日本金石文拓本、大和法隆寺樂師佛造像記より以下延喜以前に於ける本邦金石文の殆ど全部を網羅せり。

第二類、(甲)本邦書籍類 日本書紀神代卷(慶長救版本)、石清水臨時祭祀(古鈔本)、岡太府(洞院公賢自筆本)、慈鎮和尚傳(正應三年鈔本)、江談抄(鎌倉時代鈔本)、豐樂秋樂書(自筆本)、本朝文粹(寛喜二年鈔本)、高野雜筆集(承安元年鈔本)、性靈集(建久

七年鈔本)、三鈴寺文書(保安長承仁安治承の各通)、(乙)支那書籍類、尙書(唐鈔本)、同(清原宣賢自筆本)、春秋經傳集解(清原枝賢自筆同宣賢加點本)、論語集解(徳治三年鈔本)、同(正平板天文板慶長板の各通)、聚分韻略(應永板天文板の各通)、史記河渠書(唐鈔本藤原忠平の印あり)、皇朝類苑(元和勘版本)、世説新書(唐鈔本)、王子安集(唐鈔本)、杜工部集(元至正十一年刊本)同(五山版)、白氏文集(嘉承二年鈔本)、中州集(五山版)、漁隱叢話(宋版)、(丙)古經類、淨名玄論(慶雲三年鈔本)大周刊定衆經目錄(天平十三年三月十五日藤原夫人願經)、深密解脫經(天平十五年五月一日光明皇后願經)、中阿含經(天平寶字三年鈔本)、大悲芬陀利經(神護景雲二年孝謙天皇願經)、大般若經(貞觀十三年小水磨願經)、大唐西域記(大治元年鈔本)、大智度論(高麗統和廿四年鈔本)、賢聖義略問答(永祚二年鈔本)、三國祖師影(久安六年鈔本)大方廣圓覺修多羅了義經(趙子昂手書刻本元栗本)

## 會報

編輯委員會

編纂會 十月二十日午後四時より文學部陳列館貴賓室にて開催、三浦評議員、西田、植村、中村、那波、下田、岩橋、島田、の委員出席本誌第五卷第一號の編纂事務を處理したり。

評議員會 十二月三日午後三時より京都帝國大學本部會議室にて開催、濱田、内藤、桑原、阪口、三浦、新村各評議員出席、協議の結果濱田評議員庶務會計擔任、西田、阪口、三浦各評議員編纂

擔任を決し、尙ほ會費値上の件を可決したり。

## 會員動靜

入會

京都市麴町區飯田町六ノ十九

(右紹介者、渡邊世祐)

京都市室町新町間、寺内西側

同 下鴨西林町淵下

(右紹介者、新町徳之)

京都府下伏見稻荷社家町、岡部讓方

(右紹介者、岩橋小彌太)

京都市吉田二本松町四ノ一

同 寺町丸太町上ル

同 京都市立高等女學校

大津市了徳町十五

(右紹介者 三浦周行)

京都市本郷區曙町十六にノ廿七上杉方

(右紹介者 淺野長武)

滿洲公主嶺菊地町三丁目八號

(右紹介者 那波利貞)

退會

土肥利喜三 重田勘次郎 井口 泰温

死亡

田中 義成 嵐 銳郎

弘田 長

湯淺 長次

津田 三郎

河村 實

山本彌一 郎

關 保之助

高橋 俊乘

東 尙胤

中島 俊司

芝 文雄



●寄贈交換圖書

機山公頌德講演集

武田神社鎮座祭協賛會

史學雜誌 三〇の十、十一、十二

歴史地理 三四の四、五、六

考古學雜誌 十の二、三、四

經濟論叢 九の五

飛騨史壇 五の二、三

佛書研究 五七、五八、五九、

六條學報 二一三、二一四、二二五、二二六、二二七

東洋哲學 廿六の十、十一

伊豫史談

國學院雜誌 廿五の十、十一、十二